二〇一三年度・学力考査問題【国語】

（中学第三回）

注　意

一、試験時間は50分です。
二、答えはすべて解答用紙にはっきりと記入しなさい。
三、解答用紙のみ試験終了後あつめます。
四、問題は10ページで一・二の二題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

若い体育教師の緒方が陸上部の顧問になってから、大会で勝つための厳しい練習が始まった。長距離が好きな遠子は一〇〇〇メートルで記録が伸び悩んでいるため、緒方からハードルに転向するように言われ、正月返上の自主練習で記録を向上させた。

三学期に入ってからも、遠子の記録は少しずつ縮まっていった。

「ええぞ、北川。もう少しで去年の大会記録に並ぶぞ。大会まで日がないからな、ダッシュ、ダッシュ」

ダッシュ、ダッシュと緒方先生の声が背中を押す。こんなのじゃないと思う。記録、成績、何分何秒。数字に追いたてられて、苦しくて……。走るのって、こんなのじゃないと思う。

大会が終われば、すぐにハードルをやめるつもりだった。ハードルをやめて、なんにも縛られずに、自分のために走りたい。[1]大会が待ちどおしかった。

ところが、記録会の種目から突然ハードルが除かれてしまった。

「先週、隣町で事故があったやろ。ハードルに足ひっかけて、転んだ中学生が、大けがしたやつ。もし、小学生の大会で、続けて事故があったら困るってことになったらしい。しょうがない、北川は、また一〇〇〇にもどれ。まったく、あれだけ練習したのに、残念やったな」

早口に説明する緒方先生の前で、[2]遠子は棒のように立っていた。

しょうがない。残念やった。先生、そんな言葉ですんでしまうんですか。そんなん許されるんですか。

握ったこぶしの内側で汗が滲む。そのこぶしで殴りつけたかった。先生の心臓のあたりを思いっきり殴ったら、どんな音がするだろう。下唇を強く噛む。口の中に、血の臭いが広がった。

[3]「先生、ずるい」

愛子の声がした。いつのまにか、白いハチマキをしめた愛子が立っていた。

「先生、トコちゃん、あんなに練習しよったのに、かわいそうじゃが」

「そう責めてくれるな。先生じゃてつらいんじゃ。けどな、競技種目を決めるのは、ぼくらじゃないからな、どうにもならんのじゃ。理由が理由だけに、どうしてもハードルをしてくれとは言えんしな。北川、ほんまに悪かったな。おい、平田、そんな怖い顔するなや。まるで節分の鬼みたいになっとるぞ」

「もう、失礼な。なぁ、トコちゃん」

遠子は、相槌を打つことができなかった。

「北川も、そんなにふてくされるな。やれるとこまで一〇〇〇メートルでやってみよう。なっ」

遠子は顔をあげ、瞬きした。

ふてくされてなんかいなかった。[4]そんなんじゃなかった。拗ねてふてくされた後、〝しょうがない、残念やった〟と諦めてしまえるようなことじゃない。

遠子は、ハードルにちゃんとけりをつけたかった。勝てなくてもよかった。ただ、今までやってきたことをこんな形で無駄にされたくな

い。

「先生、うち、絶対嫌です」

そう言おうとした。こぶしを強く握り締め、遠子が口を開けるより前に、緒方先生は胸をそらして「ともかく、この話はここまでにしよう」と言った。

「なっ、なにをやったって無駄なことは、ないんだ。今までの練習は、一〇〇〇でも役に立つんだぞ。さっ練習、練習。二人ともそんなぶすっとしとったら、嫁に行けなくなるぞ」

5 先生は遠子の顔を見ない。愛子の背中に手をあてて、軽く前に押し出しただけだった。

「べーだ、先生なんか知らんよ」

愛子が、くくっと笑う。遠子は、こぶしを開いてみた。手のひらに、爪のあとが三つ、細い三日月の形で残っていた。

遠子は一〇〇〇を走った。

スタート直後から身体が重かった。息が、リズミカルに出てこない。心臓に空気の塊がある。そう感じるほど息苦しい。側をすりぬけていくランナーの息づかいや足音がやけに大きく聞こえた。ゴール直前でも、ぬかれそうになった。足先に、残った力を全部こめて、ダッシュした。これ以上、誰にも負けたくなかった。

パシッ。頭の後ろで、音がした。右足から頭まで電気がはしる。足首が、爆発した。そう思いながら、遠子は、ゴールの白線の上に倒れ込んだ。

九位。一二人走っての結果だった。

アキレス腱が切れていた。病院に運ばれ、ギプスをつけられた。そして、夜、四〇度ちかい熱が出た。汗がじんわりと身体を包む。堪え難い程の不快感に包まれる。

負けたんだ。

咳くと、吐き気がこみあげてきた。

なんでハードルをすすめられた時、もっと一〇〇〇にこだわらなかったのだろう。なんでハードルがなくなった時、言われるがままに、一〇〇〇を走ってしまったのだろう。

惨めだった。涙がでた。熱で乾いた頬にひりひりと染みた。悔しいとも、悲しいとも感じなかった。ただ、惨めだった。他人の言うとおりにしか動けなかった自分自身が惨めでたまらない。

遠子は呻いた。

「どうしたの？　痛い？」

付き添っていた新子が、額の汗をふいてくれる。

「看護婦さん、呼ぼうか？」

頭を横に振る。母の声が耳元で囁いた。

「我慢せんでええのよ。痛かったら、痛いって言いなさい。泣いたかて、かまわんのよ」

泣くもんか。自分でなんにも決められなくて、アキレス腱切って、病院のベッドで動けなくて……。こんな惨めな思いのまま、泣いたりするもんか。

遠子は両方のこぶしで強く目を押さえた。なのに、涙は思わぬ力で盛り上がり、こぼれていく。ひりひりと染みる涙で頬が融けていくような気がする。

奥歯を噛み締めて、こぶしに力をこめた。
そしてギプスが取れ、遠子が六年になった時、緒方先生はF市の中学校に転勤していった。
『思ったより早く、足がなおってほんとうによかった。先生も安心しました。六年になっても、陸上を続けてください。北川は、運動神経がいいから、長距離でも短距離でもいけると思う。走り幅跳びなんかにも、挑戦してみたらいいかもしれない。
先生も、中学にきて、本格的に運動部の指導ができるので、はりきっています。
北川もがんばれ。おうえんしているぞ。
緒方勇介』
太いボールペン文字のハガキが、四月の終わりに届いた。
「あんたのこと心配してくれたんやな。ええ先生やないの」
新子がええ先生やでと繰り返す。
遠子はハガキを二つに裂いた。
「遠子！」
新子が叫ぶ。
「なんでそんなことするの。あんたって子は、なんで」
新子の目から、不意に涙が落ちた。
「もうやめてよ。アキレス腱切ったのは、先生のせいじゃないじゃろ。たかが、地区大会じゃないの。それをいつまでも、ふてくされて……なんで、もうちょっと人の優しさがわからんの」
ふてくされてなんかいない。
遠子は母の顔を見つめた。母が緒方先生と同じ言葉を使ったのが、不思議だった。
ふてくされてなんかいない。絶対、そうじゃない。
「北川もがんばれ、おうえんしているぞ」
[6]形の整った大きな文字が目に染みたのだ。それは、病院の諸々の匂いや感触を思い出させた。ごわごわのシーツ、点てき液の黄色、細い注射針。頬を伝った涙と惨めさ。
先生、何をがんばればいいのですか。がんばったら、もう、あんな惨めな思いをしなくてすむのですか。たずねてみたかった。たずねて答えがほしかった。
手の中の、答えのないハガキが優しいものだなんてどうしても思えないから、母と同じように笑えなかった。ふてくされてたんじゃない。
新子が涙をふいて、ため息を吐いた。
「お母さん、時どき、あんたが怖くなることあるわ。貸しなさい。ハガキ、テープで張りつけたげる」
「いいよ」
「じゃ、自分でしなさい。なっ、遠子、もう少し、思いやりのある優しい女の子に……」
母に背を向けて、部屋に帰る。
そうだ、足のことなんか、どうでもいい。大会も、ずいぶん昔のことのような気がする。何もかも、もうどうでもいいのだ。
北川もがんばれ。と書かれたハガキだけが、許せなかった。母の渡[7]してくれたセロテープを机の上に転がす。ベッドにこしかけて、遠子はハガキを小さなたくさんの紙くずになるまで破いた。
（あさのあつこ『あかね色の風』幻冬舎より）

問一　――線1「大会が待ちどおしかった」とありますが、その理由を三十五字以内で説明しなさい。

問二　――線2「遠子は棒のように立っていた」とありますが、ここでの遠子の様子の説明として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　精一杯取り組んできたハードルが急になくなり、驚いている。
イ　大会直前の重要な種目変更について、どうするべきか迷っている。
ウ　先生があっさりと変更を指示してきたことに反発を感じている。
エ　急に種目の変更を告げられて、一瞬何も考えられないでいる。

問三　――線3「先生、ずるい」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　ハードルで去年の大会記録に並ぶほどの記録を出した遠子の努力も知らず、小学生の競技種目決定の際にハードルを除かないように主張してくれなかったから。
イ　一〇〇〇メートルでの出場を希望していた遠子を無理やりハードルに転向させておきながら、自分の都合で直前になってまた一〇〇〇メートルに戻そうとしているから。
ウ　大会直前になってハードルが種目から除かれたことを、まるで自分とは無関係の決定であるかのように平然と話しており、遠子を親身になって慰めようとしないから。
エ　遠子が今回の大会を最後にハードルをやめるつもりだと知り、中学生の大会での事故を口実にして遠子がもともと希望していた一〇〇〇メートルに戻そうとしているから。

問四　――線4「そんなんじゃなかった」とありますが、ここでの遠子の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　種目の変更で落ち込む自分をよそに愛子と先生が楽しそうに話すのを聞き、自分がのけ者にされたようで寂しい。
イ　不満があるどころか、むしろ得意な長距離に出場できるならば好結果を出す自信があるので嬉しい。
ウ　種目の変更はしかたないが、ハードルに対しての自分の努力が先生にも愛子にも理解されていないことが残念だ。
エ　先生に不満があるのではなく、取り組んできたハードルに自分なりの決着をつけられなくなったことが悔しい。

問五　――線5「先生は遠子の顔を見ない」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　自分の言葉に説得力がないことを自覚していたから。
イ　自分の決定に反発した顔をする遠子が、不愉快だったから。
ウ　遠子の態度から自分への激しい怒りを感じ、恐れたから。
エ　種目変更が遠子にとって辛いことだと想像できたから。

問六　――線6「形の整った大きな文字が目に染みたのだ」とありますが、この表現の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　先生に言われた通りにがんばった大会で不本意な思いしか残らなかった遠子にとって、自分の正しさに疑問を抱かず励ます先生の言葉は、受け入れがたいと感じている。

イ　自分の気持ちを理解せずに調子のいいことを言って転勤した先生が慰めのハガキをくれたことで、本当は苦しみをわかってくれていたと遠子は感じている。

ウ　陸上競技の専門家でありいつも適切な指導をしてきた先生が転勤するにあたり、素直になれず全力を出さなかったことを遠子は反省して申し訳なく思っている。

エ　先生がいつも応援してくれていたことを改めて感謝しながらも、大会で結果を出せなかった原因がどこにあるのかわからず、遠子は助言がほしいと思っている。

問七　――線7「遠子はハガキを小さなたくさんの紙くずになるまで破いた」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　先生に対して反発しているうちに、素直になれなくなってしまった自分を反省し、ハガキを破るように幼稚でかたくなであった自分の殻を破ろうと思ったから。

イ　先生のハガキをやみくもにありがたがる母親の言葉にいらだちをおぼえ、ハガキを破ることで直接ぶつけられない母への怒りをあらわしたいと思ったから。

ウ　善人ぶってはげます先生のハガキを見ているうちに、惨めに終わってしまった大会を思い出し、選手生命を絶たれてしまったことが悔しくてしかたがなかったから。

エ　無神経にも過去を蒸し返し、自分に一方的に指示する先生のハガキを破ることで、周囲に言われるままに行動していた今までの自分にきっぱりと別れを告げる決心をしたから。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

西洋医学はものごとの原因と結果を追求する。そのために症状を分析して、測定し、数値としてあらわす。病気を数値化することによって、つかみどころのない病気というものに、誰の目にも理解しやすいしゃくどをあたえることになる。

ア　病気を数値化すれば、統計処理をすることもでき、集団としての人間のなかで、何が正常であり、何が異常であるかということまでも、数値ではっきりと出てくる。ここには、[1]人々を数値の魔術に引き込む危険が満ちている。

イ　科学はどのような問いにも答えられるものではない。答えられる問題を見つけだして、それに答えるのが科学である。病気についていえば、まず、病人と病気を切り離して、その症状にだけ注目する。次に症状のなかから、測定可能なもの、検査可能なものを取りだす。検査の結果を症例にてらしあわせて判断して結論を出す。

これだけの過程を見ても、非常に多くのものが切り捨てられているということが推測される。おそらく、あきらかにされたことはごく限られた部分であり、ほとんどの部分が切り捨てられているのであろう。しかし、ある特定の病気を治療するためには、それで十分であることが多い。

ウ　その結果、科学はすべてのことに答えられると思い込んでしまう。科学が万能であるかのような錯覚に陥るのである。医学が病人と病気を切り離して、人間を無視していることも忘れ、検査データが人間のからだの状態のほんの一部についての情報をもたらしているに過ぎないということも忘れてしまう。[2]科学に限界のあることを忘れてしまうのである。

なかでも一番大きな問題は、医学が人間を排除しているということであろう。しかし、科学としての医学は本質的に分析不可能なものは扱えないのである。人間という存在もそれをとりまく環境もすべて視野の外に置いて、病気の症状にだけ注目してそれを分析することこそ科学なのである。

エ　科学は人間そのものをも排除してしまうが、人間のもつ分析できない問題についても打つ手をもたない。たくさんの分析不能な問題のなかで、現在の医学がもっとも注目しているものに痛みと死がある。

現在の医学では、痛みそのものを測定することはできないので、医師は間接的なデータから痛みの程度を判断する。医師が痛みがないと判断した場合には、患者が痛みを訴えても無視されることになる。そこでは医師は神のように完璧であり、痛みのように患者本人にとってあきらかな感覚さえも否定する能力をそなえているように信じられている。

痛みというのは、本来からだにそなわったけいこく信号である。お

そらくおなじ状況に陥ったときにどれくらいの痛みを感じるかということには個人差があるであろう。しかし、個人差というものも、科学の苦手とするところである。

痛みの研究が進むと、痛みの分析がはじまる。痛みには、生理的痛み、心理的痛み、霊的痛みがあるという。生理的痛みに関しては、鎮痛剤などで対処し、心理的、霊的痛みに対しては、また別の対処が必要であるという発想である。生理的痛み以外の痛みの存在に気づかなかったときよりは、状況が改善されたかもしれない。けれども、あくまでもものごとを分析しなければ対処できない科学の本質が、ここにはよくあらわれていると思う。

医師の判断によって、医学的に証明されたと考えられる痛みに対しては、いろいろな処置が施される。[3]医師は、病人そのものは自分の視野から閉め出して、痛みだけに注目する。病人は、痛みという自分だけにしかわからない感覚を医師に取りあげられてしまう。患者はもはや自分の痛みと闘う必要も耐える必要もなく、すべてを医師にゆだねる。医師に依存してしまうのである。

ここでは、たくさんの病いの苦しみのなかから、痛みを一つの例として引いたまでであって、痛みを取り除くことそのものを批判しているわけではない。

このようにして、病人から苦しみを受容する能力が次第に奪われていく。医師という［ X ］を信じ、すべてをゆだねてしまった患者は、自分の足で立つ能力を失ってしまう。自分の病気も痛みも死も、自分の問題として受けとめることができなくなる。依存性は無能力へと変貌する。

[4]このような状況で、患者の自己決定権を議論してもはじまらない。病気とそれにともなう苦しみを患者に返し、患者がそれを自分のものとして受けとめている状況ではじめて、自己決定という考えが成り立つのである。

病気の治療において、科学は確かに多くの利益をもたらした。病気のメカニズムを解明し、中心静脈輸液、超おんぱ診断、麻酔など優れた技術も開発した。しかし、私たちは科学の限界を忘れ、科学を過度に信じた結果、病気から人間を排除し、人間本来の自己感覚を否定し、病人が[5]苦しみを受容する能力を奪ってしまった。

また、病気という、病人とは切り離せない状態に病名をつけるという行為によっても、大きな問題がもたらされる。この問題は、一人ひとりの病人によってちがうので、議論することさえむずかしいが、その社会的影響は計り知れないものがあると私は考えている。

さらには、科学の名のもとに発せられるいろいろな情報が人々の健康感をしんしょくする。動物本来の「何も苦痛を感じない」という健康ではなく、検査データに依存した「正常値」が健康の基準になる。統計的な中心値からずれたためにつくりだされた「病人」が出現することになる。

また、医師が痛み、癌、死などに注目することによって、それが社会に伝播し、社会はますますそれらのものを恐れるようになる。[6]人間として受容すべき問題として受けとめるのではなく、社会の注意がそこに集中され、社会現象としての恐れを生み出す。

このように、特定の問題にだけ注意を集中する医療には、何か片手

落ちのものを感じるし、そのようなものを排除しようとする世の中にも、人間本来の姿から遊離したものが感じられる。

遺伝子診断、遺伝子治療、クローン人間の作成など、科学は生命倫理的に多くの問題をはらむ技術を次々に開発している。これらの技術そのものに問題があるのではなく、それをいかに応用するかという私たちの考え方に問題があると私は考えている。科学の進歩に見合った人間の成熟が要求される。

特にこのような科学技術が、経済的利益と結びつくときに、私たちは大きな誤りを冒す可能性がある。科学の限界を考え、人間の限界をわきまえて、謙虚に自然と向き合う姿勢が、今、特に必要とされているのではなかろうか。

（柳澤桂子「病いと科学」河出書房新社より）

問一 ――線あ～おのひらがなを漢字に直しなさい。

問二 次の文章は、本文の［ア］～［エ］のどこに入りますか。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ここで問題なのは、医師も一般の人々も医学が出した答えにだけ注目して、答えられていない部分には注目しないことである。注目しないどころか、そのような部分が切り捨てられていることにさえ気づいていない場合が多い。

問三 ――線1「人々を数値の魔術に引き込む危険」とありますが、それを説明した次の一文の〔　　〕に入る適当な語句を文中からさがし、十五字以内で抜き出しなさい。

『私たちは、科学が〔　　〕をもってしまう』

問四 ――線2「科学に限界のあること」とありますが、その例を次の中から二つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　環境
イ　検査データ
ウ　病気の症状
エ　個人差
オ　病気のメカニズム

問五 ――線3「医師は、病人そのものは自分の視野から閉め出して、痛みだけに注目する」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　医師は、個人差がある病人自身が感じている痛みを排除して、患者の立場で診断をくだすということ。
イ　医師は、患者個人の痛みの説明により診断を誤まらないように、あえて数値データから痛みを判断するということ。
ウ　医師は、患者それぞれの痛みの違いではなく、データから医師自身の判断によって痛みをとらえるということ。
エ　医師は、患者が感じている痛みを理解できないのだから、診断の材料から痛みを排除した方がいいということ。

問六　――線4「このような状況で、患者の自己決定権を議論してもはじまらない」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　医学にしろ、科学にしろ患者は専門的知識を持っていないので、自己判断は治療の妨げになるから。

イ　医者と患者が話し合いの上で治療方法を決定することが現在は普及しているから。

ウ　病気のメカニズムが解明され、治療方法も確立されているので患者はそれに従うべきだから。

エ　現在の医療では、患者が自分の病気でありながら、その病気に直接向き合うことができる状況ではないから。

問七　[X]に入る最も適当な語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　科学者　　イ　霊能者　　ウ　絶対者　　エ　技術者

問八　――線5「苦しみを受容する能力」とありますが、この能力をたとえている語句を文中からさがし、十字以内で抜き出しなさい。

問九　――線6「人間とし〜生み出す」とありますが、その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア　患者自身が受け止めるべき痛みなどが自分では対処できず社会全体で取り扱う事柄にすりかえられること。

イ　マスメディアなどによって病気の症状が社会に広められることによって個別的である病気の恐れが社会全体の不安になってしまうこと。

ウ　名医といわれる特定の医者の発言が社会に知らされることで神の予言のような力をもち社会にパニックをおこすこと。

エ　報道によって取り上げられた病気だけが人々にとっての注意すべきものであると誤解され、注意されなかった病気が流行してしまうこと。

問十　本文全体をふまえて、筆者の考えに合っているものには1を、合っていないものには2を、それぞれ解答欄に書きなさい。（ただし、すべて同じ記号の場合は採点の対象外とします。）

ア　現代医学は科学的な分析によって病気のメカニズムを解明し、多くの成果をあげているが、私たちは常に科学が絶対的なものではないことを意識していなければいけない。

イ　遺伝子を操作するなどの生命倫理に反するような科学の利用は、たとえ人間に利益があるとしても決して行ってはいけない。

ウ　病気は患者固有の千差万別なものであり、それぞれに科学は対応できないので、霊能力のような非科学的なものも治療に活用すべきである。

エ　科学には限界はあるものの科学は、人間に多くの利益をもたらしている以上、その点を積極的に評価し、限界を超えるように努力すべきである。

オ　人間も自然の中で生きていることを踏まえ、人間が作り出した科学にも、自然に対しては限界があることを意識すべきである。

【国語】

解答用紙（中学第三回）

一

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

受験番号

氏名

得点

二

問一

あ しゃくど

い てらし

う けいこく

え おんぱ

お しんしょく

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

ア

イ

ウ

エ

オ